

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成 23年 9月 20日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 山 野 香 織

事業区分	平成22年度 ・ 長期派遣助成		
研究課題名	アメリカ合衆国におけるアフリカ系移民のエスニシティとディアスポラとしての社会的戦略ーエチオピア系移民オロモのナショナリズム運動を中心にー		
受入機関	The Center for Global Studies in George Mason University		
渡航期間	平成22年 9月 2日 ～ 平成23年 9月 2日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	2,550,000円	
	使用した助成金額	2,550,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	往復航空賃(空港使用料・燃油料等含む)	230,000円
		査証発行料・手数料	40,000円
		交通費(バス・鉄道等)	260,000円
		宿泊費	1,200,000円
		留学生用健康保険料	150,000円
日 当	670,000円		

成果の概要／山野香織

今回の長期調査では、ジョージメイソン大学グローバル研究センター所属テレンス・ライアンズ準教授のもと、米国ワシントン首都圏に在住するエチオピア出身民族、オロモのネットワーク形成と、異民族（とくにエチオピア人内部の異民族）との社会的相互行為のダイナミズムと多様性について分析するため、聞き取りや参与観察をおこなった。ワシントン首都圏におけるアフリカ出身者の国別人口の割合は、エチオピア出身者が 21,749 人と最上位を占めている（2005 年 U.S. センサス）。エチオピアの歴史のなかで、オロモは教育、政治、文化の面ではアムハラやティグレ（“エチオピア人”）に支配されてきた歴史がある。したがって、オロモのアイデンティティ再構築をめざすべく 1960 年代のエチオピアでオロモの知識人たちの間で起こったオロモ・ナショナリズム運動は、欧米のオロモ・ディアスポラによって現在でも盛んにおこなわれ、オロモの伝統的な祝祭や行事などを定期的におこなっている。本調査の主なインフォーマントは、このナショナリズム運動を意識している者、つまり「エチオピア人というカテゴリーから自らを断絶し、オロモの言語、政治、伝統を復興させようとしている」人たちである。また情報収集の拠点となったのは、ワシントン D.C.にあるオロモの各政治集団や NGO 団体と、オロモの祝祭・行事、政治的集会にも積極的に参加してきた。調査期間は 2010 年 9 月から 2011 年 8 月の 1 年間である。

ワシントン首都圏に在住するオロモの人口は約 1000 人、毎年難民や移民多様化プログラムでこの地域にやってくるオロモは推定 500 人程度だといわれている。ワシントン D.C.はどちらかというところ「非オロモ」であるエチオピア人、つまりアムハラやティグレの人口が多く、彼らが経営するレストランや食材店が並ぶ「リトル・エチオピア」と呼ばれる商業エリアが存在する。しかし、そこに掲げられているのはアムハラ語文字で書かれた店の看板、アムハラの伝統料理（インジェラ、ワット）など、「オロモや少数民族の文化を排除したエチオピア文化」しか表象されていない。したがってオロモは様々な組織を拠点としながらエスニックなネットワークを発展させている。

例えば、エチオピアの反政府組織といわれるオロモ解放戦線（OLF）はワシントン D.C.を拠点に、エチオピアの平和構築とオロモとしてのアイデンティティを取り戻すことを目的とした政治・社会運動をおこなっている。さらに 1980 年代初期に D.C.に設立されたオロモ・センターも、ナショナリズム運動に携わっているアクティビストで構成される NGO 機関である。メンバーは約 20 名で、OLF よりは小規模な親族ぐるみのグループである。毎週金曜日の夜は当センターでの夕食会があるなど、アクティビスト達の交流の場が定期的にもたれている。また文化面では、伝統的なカレンダーに合わせた祝祭や新年を祝っており、報告者は 2010 年 9 月の第 3 日曜日に行われたイレチャ（感謝祭）に参加した。イレチャはメリーランド州にある国立公園の湖付近でおこなわれ、センターのメンバーに関わらず、「オロモ」と自認する者が各々民族衣装で着飾って参加をした。そのほか、エチオピアのオロモ居住地域（オロミア州）における学校づくりや教科書の提供をするための基金活動も同時におこなっている。

同じく 1980 年代初期に設立されたオロモ・コミュニティ・アソシエーションでは、政治的な活動よりはむしろホスト社会における個人的なつながりを構築することを重視している。例えば住居探し、職探し、夕食会、講演会など。英語クラス、コンピュータクラス、アメリカ生まれのオロモの子ども達にはオロモ語クラスも検討中とのこと。

このような組織的なネットワークが「オロモ」としてのエスニシティ、あるいはナショナリティを再構築していくプロセスであるのに対し、個人的でインフォーマルな人付き合いにおいては、「対エチオピア人」を意識しながらも、エスニックな境界がより曖昧で流動的である。

ワシントン D.C.はアフリカ系アメリカ人やアフリカ生まれの移民をはじめ「ブラック」とカテゴライズされる人口が多いのも特徴であり、エチオピア出身者もまた、その身体的特徴からアメリカの人種主義社会においては「ブラック」と自己／他者表象されることがある。オロモはディアスポラという地位を戦略的に利用しながら、その各々の文脈によって、オロモ、エチオピア人、アフリカ人、あるいはブラックとして、アイデンティティをそのつど選択していることが分かる。エチオピア人内部におけるエスニックな境界の曖昧性は、ワシントン首都圏における人種的、民族的な多様性により緩和されていると考えられるのではないだろうか。

追加調査：オロモ・ウィーク・イベント

また、2011年7月18日から7月25日にかけて、オロモの人口が米国のなかで最も多いとされるミネアポリス（ミネソタ州）におけるオロモ・ウィーク・イベントに参加した。当イベントはミネソタ大学とオロモ・コミュニティセンターを拠点に、青年組合による討論会、サッカー大会、コンサート、政治集会、学術研究会（OSA）がおこなわれた。当イベントへの参加者はミネソタ州やワシントン首都圏をはじめ、欧米諸国に住むオロモが多数派を占めた。とくにワシントン首都圏に住むオロモの参加者は元々ミネソタに住んでいたという人が目立ち、両州にまたがって親族のつながりや旧友とのつながりをもっている。

以上